
もも色の空

ゆながりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もも色の空

【Nコード】

N1490L

【作者名】

ゆながりか

【あらすじ】

馬鹿みたい。あんな奴が、あたしの幼馴染なんて。

そして、アイツが。異様にモテている事も。

本当に、馬鹿みたい。

そして、一番馬鹿なのは……アイツの事を、こんなに気にしている、あたし。

「待てよー…」

「嫌だ」

「なっ、何でっ？」

べーっだ。

もう、知らないんだから。

ケントなんて、大っ嫌い！！！！

「ちひろおー」

「だから、名前であたしを呼ぶなっ！これからは名字にしてって言うてるでしょ！？」

全く……何でこんな奴と幼馴染みなんだろう。
馬鹿みたい。

「何で名前で呼んじゃいけないんだよー」

「……」

何で？その言葉、そっくりそのままアンタに返すわよ！

何で……何で………

—— あんなに、モテるのよ…… —

「何をそんなに怒ってるんだー？」

「うるさいっ。怒ってないし……」

「怒ってるじゃん……」

「怒ってない！！」

「アマノジャクだなー」

違う！

アマノジャクなんかじゃない。

だいたい……アンタが、そんなにモテるのが悪い。

ヘラヘラ笑っているだけのアンタが。

馬鹿みたいに笑っているだけのアンタが。

そんな私の上では、春の空が笑っている。

桜が風に揺れて、ヒラヒラと舞い降りてきた。

「ねー…待てって、千尋^{ちひろ}」

「……名字で呼びなさい！あたしは、榊原^{ひかきばら}！アンタもあたしの名字くらい知ってるでしょ」

「まーね」

そう言って、隣で偉そうに笑うケント。

その顔を見て、余計に腹が立つ。

何よ、それ。

あたしは一人で黙々と悩んで、アンタはただただ笑ってるって言うの？

「……ケントの馬鹿」

「千尋のことを名字で呼ばないといけないなら、俺のことも名字で呼ぶんじゃ…」

^{やなぎはら}
「柳原の馬鹿」

奴の名前は、柳原ケント。

最悪な事に、あたしの幼馴染み。
そしてそれに付け加えて最悪な事に、小学校（いや、それ以前から？）一緒に登下校している。
こんな奴と。
信じられない……。

チラッと隣を見ると、やはり笑っているケント。
コイツは、いつだってそうだ……あたしが余裕がないときに、いつも笑ってて……。

そしていつも。
あたしの隣にいる。
それが、ムカつく。

「……じゃあね！」
「はっ……？ ちょっ、千尋！？」
「サヨウナラ！ 着いて来んな馬鹿ッ！」

ケントを一人残して、ズンズン進む。
あたしの上の空が、少しずつ日に照らされて、色が変わってきている。

そんな風景に目をとめながらも、足を動かした。

馬鹿、馬鹿、馬鹿。
鈍感、鈍感、鈍感。
大嫌い、なんだから……。

「ちーひー……ろっ！」
「ちょっ！？」

い、痛ッ！

思い切り握られた腕が、ジンジン痛む。
も、もう嫌だ……どうして、あたしばかりが、こんなめに……。

「――よっ、ケント」

その時、まるでタイミングを見計らったかのように声をかけてきた人物。

「お！悠人^{ゆうと}じゃん！」

あ……。

アッサリと手を離されて、ホッとした瞬間、寂しさがおそってくる。

寂しくなんて、ない。

あたしはただ、痛かっただけで、それが終わったから、嬉しい、はず……。

「やあ、榊原さん」

ッ……！

そ、そうだった……ケントに声をかけてきたのは、『男』だった……。

ヤダ、どうしよう……。

何も、話せない……。

とっさの判断。

男の人の声は無視して、空を見上げる。

そこには、待ちかまえたように、もも色の空があった。

「えっと、榊原さん？」

！？

一面、もも色の世界が、一瞬にしてその人の顔で埋まる。
なぜかのぞき込んできた男の人に、ここから逃げたいというような
想いが浮かび上がってくる。
さすがに、失礼かな…。

「……どっ、ど、も……」

あー……。

またか…。

あたしって、いつもこう。

男の人とマトモに話せない。

ケントは別で。

「……榊原さん、ケントと付き合ってるの？」

「そーだといいんだけどなー」

「っちょ、変なこと言わないでよっ」

誤解されるでしょ！

全く、この幼馴染みは……。

さっきまで、こんな奴の事で悩んでいた自分が馬鹿みたい。
ケントなんて、どっかの誰かとイチャついてればいいのに。

「にしても、榊原さんは大変だねー」

ッ?????

どうやら、ケントの友達らしい男の人が、またあたしに話題を振っ

てくる。

や、ヤメテ……お願い、デスカラ……。

は、話せない……。

何をすればいいのか、わかんないよ……。

「え、っと……」

「榊原さん？」

「千尋？」

だから、名前で呼ぶなよ。

でも、それは、言葉にならなかった。

——なぜなら。

「……ご、ゴメンナサイッ」

あたしが、逃げ出したからだ——

「千尋ッ！」

「さ、榊原さん！？」

すいません……あたし、男子苦手だから。
もう、こんなあたし、嫌だ……。

「千尋、待てよッ！」

「待たない、無理！」

全力疾走。

ダッシュだ、あたし！

追いかけるアイツ。

逃げるあたし。

馬鹿みたい……。

おいかけっこをしているあたし達を見下ろす空。

それはやはり、もも色に染まっているのであった。

桜が散る道を、全力で駆ける。

「つ……つかまえたあゝ！」

「っ、わ！！」

さすがに男子と女子という差は厳しい。

あたしは、すぐにつかまってしまう。

それでも、なんだか胸が温かくなっていた。

「もう、離さないから」

「わ、わかったから！」

後ろから、肩をつかまれて。

その部分から、だんだん熱くなっていく。

ケントの手が、あたしに触れているから。

だからあたしは、どんどん、赤く染まる。

「で、千尋」

「な、何よっ」

真剣な、アイツの表情に、少し驚いた。

アイツの瞳に、あたしが映っていて、また赤くなった。

でも、その動揺を必死に隠して。

この気持ちは、知られてはならない……。
だって、アイツは。
あたしの物じゃない……。

「どーして、怒ってたんだよ？」
「……」

こんなの、言えるわけじゃない。
このあたしが。
アンタなんかに、ヤキモチを妬いた、なんて。
絶対、言えっこない。

「千尋？」
「……」

言うべきか、逃げるべきか。
でも、逃げるなんて、不可能な事。
彼から逃げても、家がお隣さんだから。
つかまる……確実に。

「千尋……」
「……ケントが、馬鹿だから」
「???」

……。
見上げると、空。
もも色の空に、真っ白な雲が浮かんでいる。

「ケントの馬鹿」

「はっ!？」

「……。どっ、どーしてあんなにモテるのよ!!」

…あ……。

あたしの馬鹿ー!!

どうして、こういうときに限って素直なの？

「……千尋、それって……」

「アンタが、そんなにモテるから、あたし、怖くって……」

怖かったよ……ずっと。

アンタが、馬鹿みたいに、ヘラヘラ笑い続けるから。

一緒の高校。

まさかアイツが、あたしと同じ高校に入るなんて思わなかったけど、でも。

やっぱり、嬉しかった…。

その、高校生活初日の今日。

アイツは、なぜかモテた。

カッコイイ、とか言われて、すごくモテた。

そしてアイツは。

少し嬉しそうに、ヘラヘラと、ただただ笑っていた。

馬鹿みたいに。

「ケントが……ケントが、悪いんだからっ!あたしを、こんな気持ちにさせておいて、今更……ッ!もう、遅いんだからね!あ、あたしは……」

「…… ヤバ」

「……え???」

「ちよっ、何言ってるの？」

「け、ケン、ト？」

「……嬉しい、かも。千尋が俺に、ヤキモチ妬いてくれたなんて」
「ッ!？」

「そりゃ、確かに、妬いたけど……」

「アンタの口から言われるとムカつくー!ー!ー!」

「べっ、別に! アンタに妬いたわけじゃ……」

「違うの？」

「……」

「違う、けど、でも、さ。」

「あたしにだって、プライドがあるんだから！」

「……ケントなんて、その辺の女の子と、イチャイチャしてればいいじゃない。あたしなんか、かまわなくても……」

「千尋じゃないと、嫌なんだ」

「……」

「知ってるよ、そのくらい。」

「ケントは、あたしの事が好き。」

「周りにいる誰からもそう言われてきたし、あたしも少しくらいは気づいてた。」

「でも、ケントがあたしのことを好きでも、何も変わらない。」

前までは、そう思ってた。

「俺、千尋が全然振り向いてくれないから、あきらめようと思ってでも……」

「でも？」

言葉の続きが、気になるの。

あたしは、変なプライドを捨てて、ケントに思わず聞いていた。馬鹿だ、あたし。

「あきらめきれない。俺は、千尋のこと、好きだから」

……。

馬鹿。

単刀直入すぎて、実感わかないよ。

でも……

やっぱり、その一言は、あたしに熱をもたせる。

「……馬鹿ケント」

「……。お返事、聞かせてよ」

！？

へ、返事って、告白の？

今まで聞かなかったくせにー！！

あたしと、ケントの上にある空は。

どこよりも、素敵なもも色で。

あたし達の周りの空気も、もも色になっていて。

「……あたし、は、」

そして今。

あたしの頬も、もも色に染め上げていく。

「ケントのこと……」

F i n
☆

(後書き)

どうでしたか？

ちなみに、一応設定を書いておきます。

- 1, 千尋とケントは幼馴染み
- 2, 高校一年生。
- 3, 途中乱入の悠人君は、ケントの親友。
- 4, 実は相思相愛だったり。
- 5, 家がお隣さんで、登下校、朝食夕食も一緒。
- 6, 親たちも仲が良くて、しょっちゅうみんなで出かけたりもする。
- 7, ケントはモテる。
- 8, ちなみに、千尋はクラスでは地味な存在。
- 9, 大人しい千尋が、ケントにだけは感情を表す。
- 10, 何はともあれ、友達以上恋人未満。

……てな感じですね。

少しでもおもしろいと思った人は、どんどん感想・評価しちゃってください。

それでは、またどこかでお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1490/>

もも色の空

2010年11月23日06時34分発行